

聖書：マルコの福音書 6：7～13

説教題：主に遣わされて

日時：2025 年 9 月 28 日（朝拝）

イエス様の弟子たちは、今日の箇所宣教へと派遣されます。7 節の「十二人」とは、いわゆる十二弟子のことです。彼らの選任については、この福音書の 3 章 14～15 節に次のように記されていました。「イエスは十二人を任命し、彼らを使徒と呼ばれた。それは、彼らをご自分のそばに置くため、また彼らを遣わして宣教をさせ、彼らに悪霊を追い出す権威を持たせるためであった。」 彼らはこのように選ばれ、まずはイエス様のそばに置かれました。それは将来「宣教に遣わすため」でした。その時がついにここで到来したのです。イエス様は彼らを初めて遣わされます。「遣わし始めて」とある通り、これは最初のトライアル、いわば実地訓練のようなものです。イエス様はその際、弟子たちを二人一組で遣わしました。これは彼らが互いに支え合い、励まし合うためだったと考えられます。一人で孤独に陥らないように、自分とは異なる賜物を持つ他の人と組み合わせられ、互いに補い合い、強め合って働きに当たるためです。またそれは聞く側にとっても重要でした。旧約聖書の申命記 19 章 15 節にこうあります。「一人の証人によって立証されてはならない。二人の証人の証言、または三人の証人の証言によって、そのことは立証されなければならない。」 一人だけが語るのではなく、もう一人がともに証言することで語られるメッセージの信頼性が増します。そのためにも二人ずつ遣わされたのでしょう。

さらに彼らに「汚れた霊を制する権威をお授けになった」とあります。これは先に引用した 3 章 15 節で言われていた通りです。これは使徒に与えられた特有の権威です。聖書において奇跡はしばしば神から遣わされた者であることのしるし（証拠）とされて来ました。たとえば出エジプト記でモーセがエジプトに派遣される際、彼は「人々は私の声に耳を傾けないでしょう」と訴えました。すると主は杖が蛇に変わる奇跡、また手を懐に入れるとツァラアトになり、再び入れると元に戻る奇跡をお与えになりました。そして主はこう言われました。「主があなたに現れたことを、彼らが信じるためである」と。またイエス様もルカの福音書 11 章 20 節でこう言われました。「しかし、わたしが神の指によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです。」 つまり悪霊の追い出しは神の国の到来を指し示す証拠でした。その権威を弟子たちは授けられたのです。彼らがイエス様の代

理人であること、そしてイエス様を通して神の国が現実到来していることを明らかに示すためです。この権威は使徒に与えられた特別な賜物であったことは、パウロの次の言葉からも分かります。コリント人への手紙第二 12 章 12 節：「私は忍耐を尽くして、あなたがたの間で使徒としてのしるしを明らかにしました。しるしと不思議と力あるわざによってです。」

さて、8 節以降には弟子たちが派遣されるにあたってのイエス様の具体的な指示が記されています。まず 8～9 節：「そして、旅のためには、杖一本のほか何も持たないように、パンも、袋も、胴巻の小銭も持って行かないように、履き物ははくように、しかし、下着は二枚着ないようにと命じられた。」ここで語られているのは持ち物に関することです。持って行くのは「杖一本」と「履き物」のみ。食べ物も、袋も、お金も、さらには下着も二枚は不要とされました。この「下着」とは上着（外套）の下に着るシャツのようなもので、寒い時には 2 枚着ることもあったのでしょうか。しかしそれすら必要ないとされています。ではこの指示を私たちはどう受け止めたら良いのでしょうか。これは今日にもそのまま適用されるべき命令なのでしょうか。結論から言えば、これは恒久的な命令ではありません。そのことは後にイエス様が語られたルカの福音書 22 章 35～36 節を参照すると分かります。そこでイエス様は弟子たちに「わたしがあなたがたを、財布も袋も履き物も持たせずに遣わしたとき、何か足りない物がありましたか」と問い、弟子たちが「いいえ、何もありませんでした」と答えした後、こう言われました。「しかし今は、財布のある者は財布を持ち、同じように袋も持ちなさい。剣のない者は上着を売って剣を買いなさい。」つまり、この時の持ち物に関する指示は状況に応じて変わり得るということです。実際、福音書の続きである使徒の働きを読んでも、宣教者たちがこのイエス様の言葉通りに行動していたとは記されていません。むしろ彼らはある程度の食料や衣服も持って旅をしたことでしょう。パウロも同様です。つまり今日の箇所のイエス様の指示は特殊な状況におけるものだったと考えるべきです。しかもこれは短期間の宣教トリップであり、弟子たちを初めて実地に遣わす訓練的な意味合いを持った旅でした。

しかしだからと言って、ここに今の私たちに何も語りかけるものがないわけではありません。むしろここには、いつの時代にも通じる大切な原則も示されているのでしょうか。それは「物にではなく、神に信頼する」ということです。神の摂理に信頼して宣教のわざに当たることです。彼らは神の国を宣べ伝えることに専念し、集中すべき

です。ですから他のことに気を取られないようにすべきです。私たちは出かけるためにはあれも必要、これも必要、もしもの時のために、さらにこれとこれが必要と想ったりします。そうする間に荷物がどんどん増えてしまい、身動きが取れない状態になりかねません。そんな私たちにとって大切な大原則はマタイの福音書6章33節です。

「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」 まず神の国と神の義。このことに心を向け、専心集中して取り組めば良いのです。そうするなら他の必要なものはすべて神が備えてくださいます。その神を信じて進め！ということです。弟子たちはまさにこの神への信頼の下に神の国の宣教に心を注ぐようにと命じられたのです。

続く10節で、イエス様は次のように命じられました。「どこででも一軒の家に入ったら、その土地から出て行くまでは、その家にとどまりなさい。」 旅先ではある人が弟子たちを迎え入れ、宿を提供してくれるかもしれませんが。しかし滞在中にさらに条件の良い家——より快適で立派な家に住む人が宿を申し出てくれても、そこへ移ってはならないということです。もし弟子たちがより良い宿に移るようであれば、「何のためにこの人たちは来たのか」ということになってしまいます。弟子たちは快適な生活をするために出かけたのではありません。休暇を楽しむためでもありません。そうではなく、神の国のために働くためです。もしそこで家に移ったら、悪い噂が立つでしょう。「あの人たちは何のためにここに来たのか。あの人たちは何に関心があるのか」と。それは良い証しにつながらなくなってしまいます。むしろ彼らは神が与えてくださるものに満足して、その働きに当たるべきです。神は決して豪華な生活は約束しておらず、必要を満たしてくださると約束くださっています。その神が備えてくださったものを感謝して受け取り、自らに与えられた働きに没頭しなければならないのです。

11節では人々が弟子たちを受け入れない場合について語られています。前回の箇所で見たとおり、イエス様ご自身も郷里の人々から拒絶されました。さらにこの後にはバプテスマのヨハネが拒絶され、殉教する記事が続きます。つまり、イエス様に従う弟子の道にはこのようなことが予期されるということです。うまく伝えれば、みんなが歓迎してくれるわけではありません。むしろ反発は起こるのです。この後に書いてあるように、弟子たちは人々に悔い改めを求めます。それを拒否する人たちは出て来るのはある意味で当然なのです。そういう現実はあるのです。その場合、どう対応すべ

きなのでしょうか。イエス様はこう命じられます。「そこから出て行くときに、彼らに対する証言として、足の裏のちりを払い落としなさい。」 当時ユダヤ人は異邦人の地からユダヤに戻って来る際、その境界線上でこのようなことをしました。異教の地の汚れを持ち込まないためです。またこれは異邦人に、そのままでは神のさばきが臨むことを警告するものでもありました。それをここでは使徒たちを受け入れないユダヤ人に対してするのです。これはもちろん腹いせに行うものではありません。「あなたがたはこのままであれば、やがての日にまことの神の民ではない者たちとして、さばきを自らの上に刈り取らざるを得ないことになる。」 そういう警告を与えるのです。実際、使徒の働きの中でパウロもそのように行ったことが 13 章 51 節や 18 章 6 節に記されています。

さて、この弟子たちの派遣の結果はどうだったのでしょうか。12～13 節に、その報告が簡潔に記されています。三つのことが言われています。一つは「人々が悔い改めるように宣べ伝え」たことです。これはイエス様ご自身のメッセージと同じです。イエス様の公生涯の第一声も「悔い改めよ」でした。悔い改めとは生き方の方向転換です。神に背を向けて自分中心に生きていた生活から神に向かう生活へと転換することです。二つ目は多くの悪霊の追い出し、そして三つ目が油を塗って多くの病人を癒やしたことです。詳細は書かれていませんが、全体としてこれが肯定的に描かれていることは分かります。一言で言えば 1 回目の宣教旅行は成功したのです。彼らは与えられた任務を果たしたのです。

以上の箇所から私たちは二つのことを今朝心に留めて、自らに当てはめたいと思います。まず一つ目は、主は弱い者たちを用いて神の国の宣教を進められるということです。主はすでにこの十二人を選び、そばに置いて来られました。そして今日の箇所から遣わし始めましたが、彼らは決して準備が整った立派な人たちではありませんでした。むしろ色々と不十分な状態にある者たちであることがこれまで示されて来ました。たとえば 4 章 13 節ではたとえを聞いても意味が分からず、イエス様にこう言われました。「このたとえが分からないのですか。そんなことで、どうしてすべてのたとえが理解できるのでしょうか。」 また 4 章 40 節ではガリラヤ湖の嵐に遭遇して慌ててしまい、イエス様にこう言われました。「どうして怖がるのですか。まだ信仰がないのですか。」 この後も益々そうです。同じ 6 章の 52 節では「彼らはパンのことを理解せず、その心が頑なになっていたからである」と述べられますし、7 章 18 節では「あ

なたがたまで、そんなにも物分かりが悪いのですか。分からないのですか」と叱責されます。また 8 章 17 節でも「なぜ、パンを持っていないことについて議論しているのですか。まだ分からないのですか、悟らないのですか。心を頑なにしているのですか」と言われます。こんな弟子たちではあまりにも心許ない。こんな彼らでは使い物にならず、役に立たないと思われるところでしょうか。しかしそんな彼らをイエス様はここで遣わされたのです。そして彼らは与えられた使命を果たしたのです。

この使徒たちの第 1 回目の派遣は、後の教会の姿を先取りする出来事とも言えます。つまり主は同じように弱者たちからなる教会を用いてご自身の宣教の働きを進めて行かれる——その縮図です。主は後にマタイの福音書 28 章に記されるいわゆる大宣教命令を与えられます。あの時、主の前に立っていたのも、主の復活を信じなかったボロボロの使徒たちでした。しかしそんな彼らと世々の教会を主は用いることを御心とされました。その主の派遣は今日も続いています。私たちは自分を見て、十分な者ではないと思うかもしれません。第一コリント 1 章 26 節に「兄弟たち、自分たちの召しのことを考えてみなさい。人間的に見れば知者は多くはなく、力ある者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません」とある通りです。しかし続く 27～28 節ではこう語られます。「しかし神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選ばれました。有るものを無いものとするために、この世の取るに足りない者や見下されている者、すなわち無に等しい者を神は選ばれたのです。」主はそのような者たちを選び、神の国の働きに携わらせ、その使命を果たすことができるように導いてくださいます。ですから私たちも今日の御言葉を通して受け止めたいのです。主はこの不完全で弱い私をも確かに用いることがおできになる、そして実際に用いてくださる、と。その主に信頼して、私たちも主に遣わされる者として歩みたいと願います。

二つ目のことは、そんな私たちに求められていることは自分自身が神の国に献身して生きる者であるということです。イエス様は今日の箇所では弟子たちに持ち物を最小限にするよう、命じられました。それは彼らが神の国の働きに専心集中し、献身するためです。持ち物が多ければ多いほど、私たちの心をそれらに奪われがちです。この世の安心、安全、快適さ、楽しみに重心を置くようになると、神の国のためにこそ生きるという情熱は次第に鈍くなって行きます。もし私たちがそのようにして神の国の価値に生きていなければ、他の人に「神の国に入ってください」と伝えることなどで

きません。自分はこの世にどっぷりと漬かり、この世のものに信頼して生きながら、他の人にだけ「神に信頼しなさい！」とは言えないのです。先に触れたマタイの福音書 6 章 33 節に「まず神の国と神の義を求めなさい」とありました。「そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます」と。この御言葉を自分のモットーとして歩むなら、私たちはおそらく身軽になるでしょう。やがて消えてしまうこの世限りの虚しいものに多く投資するのではなく、永遠に価値のある神の国のために、自分自身と持てるものを注ぎ込むようになるはずです。そしてその人は神にこそ信頼する歩みの中で、神がくださる豊かな交わりと十分な満たしを経験して行くでしょう。そのようにまず自分自身が神の国に生き、その恵みを味わってこそ、私たちは自らの実感をもって神の国を人々に宣べ伝えることができるのです。またそのような私たちの歩みが伴っていてこそ、私たちが語るメッセージはより深く、説得力をもって、人々の心に届くのではないのでしょうか。

十二人の弟子たちがイエス様のそばに置かれ、やがて遣わされたように、この原則は私たちにも当てはまります。私たちも、ただ主のもとにとどまるためにだけ召されたのではなく、遣わされるために主のそばに置かれています。事実私たちは毎週の礼拝の終わりに祝福を受け、そこから主によって世へと遣わされます。主は私たち一人一人をそれぞれの持ち場へ、主が召しておられるところへ派遣してくださるのです。私たちは自分自身を顧み、自らがまず神の国に生きる者へと導かれることを求めたいと思います。「まず神の国と神の義を求めなさい」との御言葉に生き、神の豊かな守りと支えを自らが体験させられながら、人々をこの祝福へ招く器とならせていただきたいと願います。そのように歩んでも、すべての人に受け入れられるわけではありません。拒絶や反発もあるでしょう。それでも主はそれを乗り越えて、私たちの働きを全うさせてくださいます。そのことを信じて今週も主に遣わされるところで神の国を宣べ伝え、その広がりや完成のために用いていただく特権と光栄に歩む者たちでありたいと願います。